

Claude Markovits,

*The Global World of Indian Merchants, 1750 - 1947: Traders of Sind from Bukhara to Panama.*

Cambridge: Cambridge University Press, 2000, xv+327pp.

おおいし たか し  
大石 高志

はじめに

本書は、現在のパキスタンにおけるカラチとその北東部地域であるシンド地方出身の商人に関するほぼ初めての本格的な研究である。インドの商人層に関しては、徐々にではあるが、研究が積み上げられてきたが、まだまだそれらが扱ってきた分野は、ほんの一部に過ぎない。そして、これまで特にこのシンド地方出身の商人についての研究は皆無に等しかった。本書はそのような空白を埋める研究である。

著者は、フランス国立科学研究センター(CNRS)の部長を務めるマルコヴィッツ氏であり、約15年前に1930年代におけるインド人企業家と英領インド政府、さらに、インド国民会議派などの民族運動との三つ巴の関係について興味深い研究を残している [Markovits 1985]。今回ここに書評のかたちで取り上げる本書は、それ以来の単著であり、前作とはインド系の商人・企業家を扱うという共通性がある。しかし、本書では、特定地域出身の商人層に焦点を定めたいうえで、より通時的かつ多面的な記述を試みている。評者は、数年前にニューデリー市内のネルー記念図書館で開催された小規模な公開研究会で、著者の過渡的な研究の一端に接し、その全体像の完成を心待ちにしていたが、今回このような労作が世に送り出されたことをあらためて歓迎したい。

I シンディー商人の活動 ——ネットワークと「間隙」——

まず、ここでは本書の概要を紹介する。本書の章立ては、以下のようになっている。

- 序 章
- 第1章 南アジア系商人のネットワーク
- 第2章 出身地域の文脈——シンド地方の経済と社会, 1750-1950年——
- 第3章 シカールプール出身商人の動向, 1750-1947年
- 第4章 ハイダラーバード出身商人の動向
- 第5章 ネットワーク内の還流と組織
- 第6章 ビジネス
- 第7章 政治的関与
- 第8章 コミュニティとジェンダー
- 第9章 1947年以後のディアスポラの状況
- 結 論

まず、確認しておきたいのは、本書を通じて、シンド地方のなかでも、特にシカールプール(Shikarpur)とハイダラーバード(Hyderabad)という2つの地方都市が集中的に多くの在外商人層(ヒンドゥー教徒)を輩出してきたことが明らかになっていることである。本書の構成も、この2つの地方都市出身の商人層にそれぞれ光を当てながら進行している。まず、第1章でシンディー系の商人と南アジアのその他の商人層、さらにその他の地域の商人層、たとえばユダヤ教徒などとの比較の視点を導入し、問題点あるいは分析の視角となる点を提示する。その後、第2章でシンド地方の社会的特性や19世紀の植民地併合に至るまでの歴史的な沿革をたどると同時に、この地域の商人がいかなる役割をシンドの地域経済の中で果たしていたかをまとめている。第3章と第4章は、それぞれシカールプールとハイダラーバードという2つの地方都市出身の商人が、シンド以外のどの遠隔地に進出し、どのような経済活動を見せたかを概観している。そして、第5章以降はこの2つの商人層について、適宜比較しながら記述が進められ

ている。第5章では、特に上記の2つの地方都市と商人の出先滞留地の間で、あるいは本社と出先の支店との間で、どのようにコミュニティ内の成員や資金、情報が流通しているかを解明しようとしている。続く第6章では、商売で扱う物品や金融事業の具体例など、経済行為の現実を扱い、第7章では、商権確保にかかわる政治的な活動やそれ以外の政治的な志向がどの程度存在していたのかを論じている。また、第8章では、ネットワークの拡大に伴ってどのようにコミュニティ内の成員構成に変化が生じたか、家族や女性という点に特に注意を払って分析が試みられている。第9章では、シンド地方がインドとパキスタンの分離独立によってパキスタン側に吸収されることで生じた彼らの大規模な拠点移動と離散の概要が記述されている。

具体的には、シカールプールとハイダラーバードの両地方都市出身の商人層は、それぞれ展開した経済活動の種類や地理的なベクトルがかなり異なっていた。前者は、貿易業や金融業を軸にしながら、中央アジアやイラン、アフガニスタン、新疆などに進出していった。また、後者は、パナマやカナリア諸島、エジプト、フィリピン、ジャワ、スマトラ、日本などに進出し貿易業に従事した。しかし、他方、両者には一定の特徴が共有されていた。その特徴・特性のキーワードが、ひとつはネットワーク、もうひとつは「間隙」(nicheの意識)である(注1)。つまり、彼らの経済活動は、資金規模や政治力などでは正面からは到底太刀打ちできないような強大な西欧側の勢力とその経済展開を前にして、その勢力の周辺・辺境地域や強大勢力同士の「間隙」にあたるような境界部分に進出したり、あるいは、そうした強大な勢力が梃子入れしている主軸の経済活動では見落とされてきていたようなマイナーな経済分野に特化したものとなった。そして、こうした「間隙」を縫うような経済活動を可能にし、かつ支えていたのが、彼らによって広域的に張り巡らされたネットワークであった。このネットワークは、彼らの故地であるシカールプールやハイダラーバードと、中央アジアや新疆の地をアフガニスタンやヒンドークシュ山脈越えに結び、さらには海を越えてカナリア諸

島やパナマまでをつなぎ合わせて、まさに間隙を縫うように資金や市況情報、特定の物品を流通させたのである。

本書で浮かび上がっている2つの地方都市出身の商人層の動向を、さらに単純化して整理すると、次のようになる。シカールプール出身の商人層は、特に強大勢力の周辺地域や強大勢力同士の「間隙」にあたるような「地理的な間隙」に効果的に進出した。もともと18世紀後半にドゥッラーニー(Durrani)朝に資金提供することでアフガニスタン方面に地歩を得ていた彼らは、19世紀中頃から20世紀はじめに、さらに、ロシア領中央アジアや中国の新疆地区などに進出した。これらの地域は、英露両帝国の周辺地域やその緩衝地域にあたり、彼らは、諸勢力間のバランスの中で巧みに動いた。彼らの経済活動は、インドとこうした遠隔地の間を結ぶキャラバン交易をふまえつつも、出先の支店(事業所)での金貸し業や先物投資業が主となっていた。商品経済が未成熟で流通する資金も不充分であったこれらの地域には、一定の資金力と組織性、在地社会への一定の接近によって確保されていた情報力などをもつ彼らのような存在を受け入れる余地があった。また、他方、ハイダラーバード出身の商人層は、より広域的なネットワークを擁しつつ、西欧資本や彼らより強力な在来資本によってはカバーされていなかった「機能的な間隙」に特化する戦略を取った。そうした業種には、具体的には、西欧側から「東洋旅行」のために訪れる旅行者や一時滞在者向けのおみやげ物店の経営や、アジアの絹製品などの貿易販売業などがあつた。

本書の最大の貢献は、何をおいても、このようにシンディー系の商人層の出自やその地理的分布、経済活動の概要を描き出したという点である。もちろん、インドの他地域出身の商人層についても、まだまだ研究は不足しているが、これまでは特にこのシンディー系商人については、あまりにも基本的な情報が欠けていたのである。

## II 研究史のなかでの位置——商人研究と移民研究——

結果として、本書は、南アジアの商人層に関する研究を豊かにし、さらに研究の方向性を進化させる端緒となり得ている。

南アジアの商人層のなかで、これまである程度積極的に取り上げられてきたコミュニティは、端的に言えば、植民地期にイギリス植民地経済に少なくとも一時期は寄り添ったり、かなり近い距離で成長を見せた人々、具体的にはパールシー (Parsi) やマールワリー (Marwari) であり、もしくは、独立後のインドやパキスタン、バングラデシュで有力な産業資本 (財閥的な多角事業に成功した家系を含む) への成長を果たした人々であった(注2)。彼らは、時代の有力勢力や有力業種に関わりをもったり、なびいたりすることで優勢になり得てきた商人層たちと言っても良いだろう。しかし、こうした商人層は、南アジア地域の商人層の一部分であって、その他にも多くの商人層が存在することは言うまでもない。そして、特にこれまで研究が進んでこなかったのは、たとえばシンディーのように、地理的な拡散傾向を伴ったり、植民地経済や国民経済的な部分との関係が相対的に疎であった人々であった。換言すれば、広域的あるいは国家横断的な物流や、時代の諸業種・諸経済分野のなかで非主流あるいはマージナルな業種に活路を見出してきた人々であった。これまでは、こうした活動を見せた商人層について、史料的な困難(後述する)という事情もあって、遅々として研究が進んでこなかった。たとえばこうした諸コミュニティのうちでチェットィアール (Chettiar) については、滞留先の特定地域での活動を追う貴重な実証研究がわずかに報告され、最近になって、コミュニティの動き全体を視野に入れようとする研究が1点上梓されたばかりである [Weerasooria 1973; Mizushima 1997; Rudner 1995]。シンディーについては、近年になって、ロシア領時代の中央アジアやアフガニスタン、中東での活動に言及する研究が現れたばかりである [Dale 1994](注3)。また、評者自身

は、同様に広域ネットワークを駆使したムスリムの商人層を最近の研究の対象に据えている [大石 1999a; 2001; Oishi 1999; forthcoming]。いずれにせよ、今回のこのマルコヴィッツ氏の研究は、インドの商人層研究の貴重な成果である。

また、本書は、南アジア系の様々な商人層の間での比較の視点を導入していることにも特徴がある。これまでは個々の研究者が、自己の取り上げる商人層コミュニティについて、非常に特化した研究を行ってきた。もちろん、それらによって得られた新しい知見は、それとして受け継がれてきている。しかし、それらはあまりにも個別の研究として行われてきたがために、商人層同士を比較・相対化して見ることは少なかったし、また、できなかった。また、せっかくそれぞれ異なる商人コミュニティを扱う複数の論説を編した論集が編まれても、こうした課題は扱われてこなかった [Tripathi 1984]。その結果、たとえばどのコミュニティがどの地域に進出し、どのような業種に進出したかはわかっても、それは断片的・孤立的な情報のままで放置され、なぜそのコミュニティがそうした特化性を持ち得たか、他のコミュニティはなぜ別の地域や業種に進出したかなどの点について、説得力のある議論を提示することは難しかった。その点、本書には、常に比較と相対化の視点を維持しようとする姿勢がある。シンディーの商人が自身よりも有力な商人層や資本家を観察し、時代の経済活動を俯瞰しながら、「間隙」に入り込んでいったように、研究者もその「間隙」たり得た事情や特定のコミュニティがその「間隙」に特化できた経緯を俯瞰する必要があったとも言えよう。具体的な作業としては、各商人コミュニティの活動がどの地域の、どの分野に、いつから特化していったのかという事実の整理・確定や、コミュニティごとの資金規模の比較などがそれにあたる。こうした作業は、本書中でもまだ基礎的なものにとどまっている。しかし、今後、本書も含めて比較・相対化の意識を備えた研究が蓄積されていくことで、より目配りが利き、より統合的なインド系商人世界の俯瞰図が浮かび上がってくるものと期待される。

また、本書は、南アジア系移民に関する研究とし

ての側面もある。南アジア地域は、中国と並んで、歴史上世界の各地に数多くの移民を送り出してきたし、その結果として、現在、世界各地の様々な場所で、定住化した南アジア系の人々が確認できる。もちろん、こうした南アジア系移民に関する研究は数多い(注4)。しかし、これまでの研究にはある種の偏りがあったことは否めなかった。最も充実した研究を残してきたのは、19世紀前半から相当の組織性を伴って機能した年季契約労働者制度やインド移住労働者の中から選んだ徴募人を通じて労働者の移入の流れを安定・継続化させるカンガーニ(kangani)制度などのリクルート・システムによって生じた労働者の流れについてである(注5)。こうした流れは、その労働者の需要源であるプランテーション・エステートに加えて、植民地当局もサポートや管理・監督の役割を担っていたため、まとまった記録が残されている。また、彼ら労働者の中から発生した現地残留者もまとまった数に上ったため、植民地当局の注意を喚起しやすかったのである。これに比して商人層は、そうした植民地体制側の制度的後押しが労働者に比べると希薄で、その移動もプランテーション以外の一一般の市場経済論理や自身のコミュニティ内の社会的事情に左右される部分が大きかった。このため、まとまった史料は、労働者関係のように到底望めず、商人層自身が残す記録史料の粘り強い探索や、滞留先の地域経済に関わる史料の中からの情報の手探り的な抽出などの作業に、膨大な時間を費やさざるを得ないのである。本書は、こうした作業を伴っている労作でもあることを付言しておきたい。

### III 研究の今後——「間隙」論を越えて——

本書の最大の弱点は、経済活動そのものについての記述が十分ではなく、さらに、その記述自体も数値的な裏づけが貧弱である点であろう。この点は、上記のような史料的な困難などを差し引いても、少々不満が残る点であろう。評者は、日本社会経済史のなかの高度な成果の一端にふれる機会もあるのだが、それらと本書に提示されているデータとを比べると、雲泥の差があると言っても過言ではない。もちろん、

こうした点を、本書のみに認められることのように指摘するのは酷であろう(注6)。われわれは、こうした差異の背景に、記録を残すということに関する商人層自身の意識や規範の違いといった問題を想定したい衝動にさえ駆られる。しかし、それにもかかわらず、本書には、推量的・暫定的な統計であっても現在の記述以上に組み入れ、経済活動の過程を追う試みの余地があったように思われる。たとえば、インドを経由させる中継貿易のデータや、彼らの特化していた物産の地域間貿易額の推移などである。本書では、遠隔の滞留地で死亡した商人の財産移転に関する記録が有力なデータのひとつとして使われているため、むしろ、経済活動の結果として蓄えられた財に関して、記述が詳しくなっている。

さらに1点、本書の議論の中核に関わる部分について言及したい。上述のように、本書の議論の中核的な部分には、「間隙」という概念、あるいは分析の構図がある。評者は、この概念の使用に一定の有効性と説得力を見出しつつ、同時にためらいを覚えた。この著作を通じて、事実として、シンディー系の商人層が英露の諸帝国や植民地経済の「間隙」に非常に巧みに入り込み、経済活動を維持してきたことは理解できた。しかし、この「間隙」という概念は、そこで議論を収めさせるための道具となつてはならないはずである。むしろ、それは、そこから議論や分析をさらに深めていくためのものであろう。本書では、たしかに序章や第1章で、さらに踏み込んだいくつかの分析の視角が提示されかけているが、それがそれに続く本文の議論の中では、発展されていないように感じる。また、「間隙」論は、シンディー系商人をあくまでも、「脇役」的な存在にとどめてしまう危険性もあるように思う。たとえ活動した地域が当時の「主役」的な経済地域とはずれていても、また、たとえ扱う額が統計上で「主役」の西欧資本側の額と比べてマイナーなものであっても、そうした物差しでは掴み切れないような独自の役割を彼等は担っていたように、評者は感じる。それは、たとえば西欧資本側ではカバーできないような遠隔地に自ら商品経済や物流の歯車となって進出していく役割であったり、西欧の旅行者に東洋趣味のお土産物

を提供し「東洋幻想」を生じさせる「夢の仕掛け人」的な役割である。こうした領域では、彼らはもはや「主役」なのである。先述のように、評者は、同様に広域的なネットワークを巡らしていったムスリムの商人層について若干の研究を進めてきているが、彼らに関しても、非常に戦略的な部分や「植民地経済の乗っ取り」的な性格は認められる。こうした研究に関わる我々の使命は、歴史史料の山の中から、まさに、こうした性格を炙り出し、これまでの西欧中心的・西欧主役的な記述や概念を打ち破っていくことにあるのではなかろうか(注7)。

(注1) nicheの元来の意味は、言うまでもなく「壁がん」であり、また、そこから派生した「適所」、「独特の地位」である。しかし、ここでは全体的な文脈を加味して「間隙」と意識する。

(注2) Siddiqi (1982), Timberg (1978) 参照。日本では、伊藤正二氏等の財閥系企業の研究が代表的なものとしてあげられよう。

(注3) このテール氏の研究も一部で踏まえている記述に、羽田(1995, 75-109)がある。また、籠谷(2000)は、日本での活動についての先駆的な記述を部分的に含む。

(注4) 網羅的ではないが、日本では、杉原(1999)、内藤(1996)、古賀・内藤・浜口(2000)、大石(1999a; 1999b; 2001)がある。

(注5) 先駆的な制度研究として、Tinker (1974)、また、特定地域への労働者移動に関する最近の研究には、Carter (1995)がある。

(注6) そうした差は、本書に限ったことではなかろう。インド社会経済史の資料的裏づけには、非常に困難が付きまわっている。ただし、充実したデータが一部で期待できる土地保有や徴税関係、イギリス系のインド進出企業の分析は、逆に史料の膨大さや煩雑さに圧倒されることもあるようである。

(注7) こうした視角については、すでにその理論的な部分の端緒を大石(1999b, 7-24)に記した。また、より具体的な記述は、大石(1999a, 55-80; Oishi forthcoming)に含まれている。

文献リスト

〈日本語文献〉

大石高志 1998. 「インド西部出身のムスリム商人層と環インド洋経済圏」『南アジア——構造・変動・ネットワーク——』文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」総括班編 季刊誌 第1巻第2号。

—— 1999a. 「南アフリカにおける南アジア系移民の歴史」大石高志編『南アジア系移民——年表および時期区分——』文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」ディスカッション・ペーパー No.4.

—— 1999b. 「南アジア系移民史の研究」大石高志編『南アジア系移民——年表および時期区分——』文部省科学研究費・特定領域研究(A)「南アジア世界の構造変動とネットワーク」ディスカッション・ペーパー No.4.

—— 2001. 「南アフリカにおける経済自由化とマイノリティ・ビジネスマン——インド・ムスリム系衣料製造販売業者の事例を中心に——」南埜猛・関口真理・澤宗則編『越境するインド系コミュニティ——ホスト社会とのかかわり——』文部省特定領域研究「南アジアの構造変動とネットワーク」ディスカッション・ペーパー No.13.

籠谷直人 2000. 『国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会。

古賀正則・内藤雅雄・浜口恒夫編 2000. 『移民から市民へ——世界のインド系コミュニティ——』東京大学出版会。

杉原薫 1999. 「近代システムと人間の移動」『移動と移民——地域を結ぶダイナミズム——』(講座世界歴史 19) 岩波書店。

内藤雅雄編 1996. 『南アジア系移民社会の歴史と現状——イギリス連邦諸国を中心に——』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

羽田正 1995. 「西アジア・インドのムスリム国家体系」歴史学研究会編『近代世界への道——変容と摩擦——』(講座世界史 2) 東京大学出版会。

## 〈外国語文献〉

- Carter, Marina 1995. *Servants, Sirdars and Settlers: Indians in Mauritius, 1834-1874*. Delhi: Oxford University Press.
- Dale, Stephen Frederic 1994. *Indian Merchants and Eurasian Trade, 1600-1750*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Markovits, Claude 1985. *Indian Business and Nationalist Politics, 1931-39: The Indigenous Capitalist Class and the Rise of the Congress Party*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mizushima, Tsukasa 1997. "A Historical Study on Land Transaction in a Local Town in Malaysia: Kuala Kangsar Shop Lots between 1885 and 1995." 『地域学研究』第10号 駒沢大学応用物理研究所.
- Oishi Takashi 1999. "Muslim Merchant Capital and the Relief Movement for the Ottoman Empire in India, 1876-1924." *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*. No. 11.
- forthcoming. "Indian Muslim Merchants in South Africa, 1875-1920: With Special Remarks on Their Migration in the Indian Ocean Region." 地域研究企画交流センター (国立民族学博物館) 編 *South Asian Migration in Comparative Perspective: Movement, Settlement and Diaspora (JCAS Symposium Series: Population Movement in the Modern World)*.
- Rudner, David West 1995. *Caste and Capitalism in Colonial India: The Nattukottai Chettiars*. Delhi: Munshiral Manoharlal.
- Siddiqi, Asiya 1982. "The Business World of Jamsetjee Jeejeebhoy." *Indian Economic and Social History Review*. Vol.21. No.3-4.
- Timberg, Thomas A. 1978. *The Marwaris: From Traders to Industrialists*. New Delhi: Vikas.
- Tinker, Hugh 1974. *A New System of Slavery: The Export of Indian Labour Overseas 1830-1920*. Oxford: Oxford University Press.
- Tripathi, Dwijendra ed. 1984. *Business Communities of India: A Historical Perspective*. New Delhi: Manohar.
- Weerasooria, W. S. 1973. *The Nattukottai Chettiar Merchant Bankers in Ceylon*. Dehiwala: Tisara Prakasakayo.

(東京大学東洋文化研究所非常勤研究員)